

うつと社会構造

～不登校問題 その2～

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士） 金屋光彦

前回、スクールカウンセラーが扱う問題で、最もポピュラーな不登校問題を、「子供とIP」というテーマで、取り上げた。今回は、その背景をさらに考えてみたい。

“不登校になったきっかけ”として、「学校生活に起因」、「家庭生活に起因」、「本人の問題に起因」と3つに分けて考え、1つにその要因を絞っていくと、「学校」と「本人」起因がそれぞれ3割強、「家庭」起因が約2割といわれる。

現場のケースでは、3つあるいは2つの項目に重複しているのが通例だが、具体的な項目単位でみると、最も多いのが、“その他の本人に関わる問題”である。この“その他の本人に関わる問題”もいろいろだが、最近クローズアップされてきているのが、うつ傾向の増加と発達障害に関わる問題である。

不登校児童生徒を理解する際に、今まで本人要因として、“無気力”や“怠け”等が指摘されて久しいが、その中に、このうつ傾向の増加や発達障害を潜在していたケースと解釈すべきものも少なくない、と推測される。

北海道大学が2004年1月に約3千人を対象に行った調査では、抑うつ傾向にあった小学生は7.8%、中学生で22.8%で、このうちうつ病の可能性がある者は、4.6%だった。また、神戸女学院大が行った約4千人の調査でも、抑うつ傾向の小学生は16.2%、中学生で23.1%、このうち3～5%が罹患者とされる。心の風邪とも言われるうつ、米国の診断基準であるDSM-IV（精神疾患の分類と診断の手引き）では、一般人口のうつ病有病率は平均約2.8%とされ、日本でも有病率2%、生涯罹患率6%と言われる。この2つの調査を見ると、中学生の4人に1人はうつ傾向を示し、うつ病罹患率も大人と同等かそれ以上の結果になっている。

これから言えることは、“子供達の心は疲れている”、という事実である。

パーソナルな時代になった今も、学校では1学級に通常約30人在籍し、あの狭い教室という空間で、一斉一括

授業が行われている。朝から3時過ぎまでは、あの喧噪の中で同じメンバーで一緒に過ごすのである。会社勤務の大人は、昼休み街角へ出て1人じっくり昼食も可能だが、給食時間も同行動の学校では、一歩間違えれば、楽しいはずの教室がストレスフルな空間に変貌してしまう。

また、学校が終われば、塾や習い事で忙しく、かつ家庭ではグレイトマザー、あるいはモンスター化した親に支配されたりする。自己愛の強い親に対して、家でも親の意向に従うよい子を強いられ、ストレス過剰になっているケースも希有ではない。中には、破綻事件に発展し、新聞紙上で報じられたりしている。

また一方で、母親と子供との関係のみが突出して濃密な関係にならざるを得ない社会構造があり、育児を担う母親の孤立化も問題になっている。祖母や親類も近くにおらず、地域社会も希薄化する中、父親である夫も歪化する職場を生き抜くことで精一杯、その上に夫婦関係の溝が深かったりすると、孤立の中で子育てに苦悩する母親も追い込まれ疲弊する。中年クライシスと言われるように、今は母親への支援も必要な時代だ。親のモンスター化の背景には、この孤立化があると私は見ている。

母親の不安定さは、子供達へ容易に伝染し悪影響を与える。さらにカウンセリングを進めていくと、母親の不安定さは、職業人としての父親の不安定さにも起因していることが見えてくる。長期間勤めてきた企業を、いとも簡単にリストラされる。“雇用者の生活を守る”という当たり前の責任感さえ失った心ない経営者により、社縁の絆だけで生きてきた家族が、これによって一挙に拠り所を失う。その結果、前回指摘したように、子供が家族全体のIP*になり、「社会は冷たい。自分さえよければいいのか～」と社会への不信感を強くし、無気力やうつ傾向を強め、不登校に陥るのである。根はまことに深いと言えよう。構造改革というのであれば、この構造の負のスパイラルこそ、早急に改めてもらいたい。

*IP: Identified Patient